人文研アカデミー2014
国際シンポジウム
JINBUNKEN ACADEMY

「続けばいいのですが…」

«POURVU QUE ÇA DURE…»

政治・主体・〈現代思想〉

——〈現代思想〉は今、「権力の母」の言葉にどう答えることができるのか

政治の舞台に「プロレタリアート」はもういない。

「市民」は議会と街頭のあいだで彷徨っている。世界に広がる不平等の波は、平等への熱情を掻き立てながら、政治の失調を誰の目にも唯一の政治的リアルとして映し出す。間隙を縫って「テロリスト」が「全員」の敵として登場する。

«Pourvu que ça dure…»
——「続けばいいのですが」。

かつてナポレオンの母は、息子の戴冠式の際にこう呟いたとされる。この言葉はいまや、政治そのものに対して差し向けられるべきだろう。構造主義でもポスト構造主義でも、〈現代思想〉は「主体」を問題にすることで、哲学的のみならず政治的な主張を行なってきたはずである。ではそれは今、「権力の母」の言葉にどう答えることができるのか。

講演と討議

Étienne Balibar
エティエンヌ・バリバール

Bruno Bosteels
ブルーノ・ボスティールス

Yoshihiko Ichida
市田良彦

※フランス語・英語・日本語（通訳あり）

参加無料・予約不要

2015.1.12（月・祝）14:00-18:00

京都大学百周年時計台記念館 2F
国際交流ホール I, II

連絡先：京都大学人文科学研究所総務掛
TEL 075-753-6902　E-MAIL：z-academy@zinbun.kyoto-u.ac.jp

主催　京都大学人文科学研究所、京大人文研公募研究班「ヨーロッパ現代思想と政治」、
日本学術振興会科学研究費基盤研究B「『現代思想』と政治」共同研究グループ

JINBUNKEN ACADEMY
人文研アカデミー2014

国際シンポジウム

「続けばいいのですが…」
«POURVU QUE ÇA DURE...»
政治・主体・〈現代思想〉

登壇者紹介

エティエンヌ・バリバール
Étienne Balibar

1942年フランス生まれ。パリ西大学名誉教授・コロンビア大学招聘教授。1965年、ルイ・アルチュセールらと共著で『資本論を読む』を刊行。その後現在まで、スピノザ、ルソーからヘーゲル、マルクスを経て、アルチュセール、フーコー、デリダにいたる近現代思想史の再解釈を中心に、現代政治における個体性と共同性の関係について考察を続けている。主著に『大衆の恐怖(*La crainte des masses*)』(1997)、『市民 主体(*Citoyen Sujet*)』(2011)など。邦訳に『プロレタリア独裁とはなにか』(新評論 1978)、『市民権の哲学』(青土社 2000)、『ヨーロッパ、アメリカ、戦争』(平凡社 2006)、『人種・国民・階級』(I. ウォーラーステインとの共著、改訳新版:唯学書房 2014)ほか多数。

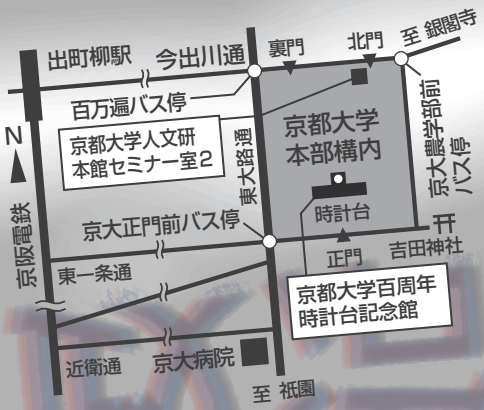
ブルーノ・ボスティールス
Bruno Bosteels

1967年ベルギー生まれ。コーネル大学教授。本領とするラテンアメリカ現代文化研究とともに、英米圏で、フランス現代哲学、特にアラン・バディウの著作の翻訳や紹介をはじめ旺盛な著述活動を展開している。主著として、『バディウと政治(*Badiou and Politics*)』(2011)、『ラテンアメリカにおけるマルクスとフロイト(*Marx and Freud in Latin America*)』(2012)。バディウの著作の翻訳として、『主体の理論(*Theory of the Subject*)』(2009)、『フランス哲学の冒険(*The Adventure of French Philosophy*)』(2012)など。日本語で読める論文に、K.ドゥージナス+S. ジジェク編『共産主義の理念』(水声社 2012)所収「左翼主義の仮説 テロルの時代の共産主義」がある。

市田良彦
Yoshihiko Ichida

1957年西宮生まれ。神戸大学国際文化学研究科教授。現在、京都大学人文科学研究所公募共同研究班「ヨーロッパ現代思想と政治」班長。アルチュセール、フーコー、ネグリ、ランシエールらの現代哲学者をとりあげる多くの論考の核には、革命的状況における政治的主体の構成とそのアクションに関する考察がある。著書に、『闘争の思考』(平凡社 1993)、『ランシエール 新〈音楽の哲学〉』(白水社 2007)、『アルチュセールある連結の哲学』(平凡社、2010)、『革命論』(平凡社 2012)、『存在論的政治』(航思社 2014)。近年、『脱原発「異論」』(共著、作品社 2011)、『債務共和国の終焉』(共著、河出書房新社 2013)をはじめ、時局についても積極的な発言を続けている。

2015.1.12(月・祝) 14:00-18:00



京都大学百周年時計台記念館 2F
国際交流ホール I, II (12日)

○市バス「京大正門前」下車徒歩3分、または「百万遍」下車徒歩10分
○京阪本線/叡山電車「出町柳」下車徒歩15分

京都大学人文科学研究所 1F
セミナー室 2 (17日)

○市バス「京大農学部前」下車徒歩1分、または「百万遍」下車徒歩5分
○京阪本線/叡山電車「出町柳」下車徒歩15分、北門入ってすぐ右

※駐車場はありませんので、公共交通機関をご利用下さい。

関連イベント

Journée d'études
Ce que *nous* devons à la lecture d'Étienne Balibar
Individualité et communauté, de Rousseau à Blanchot
Avec la participation de : Étienne Balibar, Gabrielle Radica, Junji Sato, Yoshiyuki Sato et Kazuhiko Ueda
Langue : Français

Le samedi 17 janvier 2015 (14:00〜19:00)
À l'Institut de Recherches en Sciences humaines, Université de Kyoto (Bâtiment principal, salle de séminaire 2 au RdC)